

男子部中等科合唱

「中等科の自主的な力」

武田 若菜

I. はじめに

男子部6学年で「鷗」を歌うことは決まっていたため、中等科だけで演奏する曲は、タイプの違うもので年令相応であり、歌以外に授業でやっていることが反映できる曲であることを考えた。中等科2年では毎年ミュージカルを映像で鑑賞し、舞台をつくるとはどんなことかを考える。(今年は男子部として初めて、3年生が生舞台を観に行くことにした。)それで、昨年リメイクされたレ・ミゼラブルより「民衆の歌」を選んだ。自由を願う祈りの気持ちをこめて歌ってもらおう。もう一曲はトラディショナルでありながら多くの編曲もされている「Ding, Dong み空高く」。この曲では鐘の音に託された祈りをイメージした。

2. 経過

A: レ・ミゼラブルでは2つの課題を考えた。①中2の鑑賞を本物の体験とする。②英語の訳詞を自分たちでも試してみることによって、詞を自分たちのものとするのと、歌詞の翻訳をすることの難しさを知り、より歌詞を大切にしたい思いをもって歌わせたい願いである。

B: ディンドンでは①ア・カペラに取り組むこと。②少しでも自分たちで音取りする体験をもたせる。③器楽も入れた編曲にして、普段の教育の発表と位置付けるならば、変声期の学年が多く時間を器楽に割いているので、世界で1つの男子部生らしい編曲にして演奏したいと考え、実践に移った。

レ・ミゼラブルは大部分が2声であり、途中からピアノも入るため、スムーズに音取りができたが、最後の4声に分かれるところでは音程が取りにくく苦労した。また出だしは歌詞に因んで、スネアドラムのソロにつづき、単旋律のア・カペラから始めたので担当演奏者には大変な緊張があっ

たようだ。

また英語の詞からオリジナルの日本語歌詞をつける勉強は英語科の勉強としての授業で早く取り上げていただき、音楽に合わせる時、同じような意味でも、どの日本語を選択するとリズムや拍に納まるか、ただ訳せばよいのではない難しさを教科横断の授業をすることで学べたのではないかと思う。

「み空高く」では、中等科3年には2年の学びの上で実物に触れる勉強をすることを初めて企画した。ミュージカルの出しもの別に、ロングランで組まれた舞台に行き、舞台装置がよく見える天井桟敷席から見学をした。プロ意識の高い子役の方の演技や歌声、席からは見えないであろう役どころの人でも決して気を抜かない立ち居振る舞い、合唱の迫力ある歌声に圧倒され、自分たちの演奏にも活かしたいとの感想が多く寄せられた。その感動と使命感を味わった3年生が組織を組んで中等科として指導の役にも徹した。練習の時間には気持ちの向かない2年生をやる気にさせることに苦労しながらパートを必死にまとめ、音程の定着を図っていった。

2年生には合唱以外に、舞台転換のイス並べの修得の必要があり、音楽の時間も半分はそちらに割き、それ以外の時間も使って練習が行われた。今年度は一番初めの時間にプロの方がいらしてくださり、心構えとプロの技を教えて頂いたおかげで、リーダーになった3人からは、その真剣さが一段と厳しくクラスに伝わったことと思う。

一番この曲において申し訳なかったのは、この曲の編曲であり、授業中1、2年生は全員がリーダーで吹けるようにしたので、何とかそれを編曲に活かしたいとねばったのだが、時間ばかり費やした割に全員に吹いてもらうことはできず、後半の厚みを出すところで、和声もリズム的にも彼らの技量を越えた編曲になってしまい、変更を重ね

ることになってしまった。合唱の生徒たちは、自分のものにできないまま本番を迎える不本意さが残ってしまった。リコーダー、スズ、バイオリン、ファゴットを入れたことによる素朴な「み空高く」の演奏は温かな味わいの音楽（演奏）となり、おとなの評価と子どもの評価は分かれた。男子部生の素直さは表現できたと思う。

今年の音楽会では教科横断の取り組みも加え、英語科以外に理科では声帯の仕組みを取り上げてくれた。ペットボトルとゴムチューブ、空気入力で手作りの模型を作成し、発声のメカニズムを学べた。当日はロビーにて展示することもできた。



「み空高く」では、1年生の変声期前の人たちの声がとてもきれいだったので、編曲の時には、その美しさを活かすことも心掛けた。しかし、この時期の生徒たちは成長も早く、本番を迎える頃には、このパートを担当できる人は半数に減ってしまっていて残念であった。

3. 終りに

中等科3年生がクラスの中では、自分たちで自主的に音取りをし、中等科全体のリーダーとして下級生への指導も、ある段階までは彼らが自主的に行った。過去にこんな行動を見たことがない。音楽教員が水を向けたのは確かだが、教員と協力して作り上げる経験は男子部始まって以来のことであったと思う。3年生は「鷗」でも全学年で一番力を出せたクラスであった。練習段階で力を出してくれた人たちが、本番にそれぞれの事情により数人出られなかった。心から残念であった。全員で歌いたかった。



編曲については、素朴さよりも男子の迫力あるカッコいいものを求めていたようで、そこには不満の声もあった。編曲の力も養って、次回は生徒が自分たちの思うような編曲ができることを、目標の一つとしたい。

後期練習では一人で3学年4パートをみることは難しく、高田先生にも手伝っていただき、大変ありがたかった。また、教科横断授業を快く引き受けてくださり、展示にもご協力くださった山縣先生、前原先生には特にお礼を申し上げたい。